

# 認知症と向き合う

詩人 藤川幸之助



藤川幸之助(ふじかわ こうのすけ)

詩人・児童文学作家。1962年、熊本県生まれ。小学校の教師を経て、詩作・文筆活動に専念。認知症の母親に寄り添いながら、命や認知症を題材に作品をつくり続ける。2000年に、認知症の母について綴った詩集『マザー』（ポプラ社、2008年改題『手をつないで見上げた空は』）を出版。現在、認知症の啓発などのため、全国各地で講演活動を行っている。著書に、『満月の夜、母を施設に置いて』（中央法規出版）、『ライスカレーと母と海』『君を失って、言葉が生まれた』（以上、ポプラ社）、『大好きだよ キョちゃん』（クリエイツかもがわ）などがある。長崎市在住。

2012年9月、母が84歳で亡くなった。母は60才の時に若年性アルツハイマーになった。初期の12年は父が介護をし、父が亡くなった後は、父の遺言で次男のボクが12年間母の介護に参加した。自分は次男なのに何故介護？と思った。がしょうがないや…の感じだった。

当時教員をしていて母を施設に入れた。家に引き取れない自分を責めた。あるとき、施設から帰ろうとしたら母が自分の服のすそを強く握って離さなかった。そして後についてきた。自分が帰ったあと、母は施設の扉の前に2時間いた…ということを経験した。

そのことがきっかけで母を住まいの長崎に引き取った。徘徊がすごく探るのが大変だった。自分はかなりいらだっていた。徘徊は父が死んだことが判らず、死んだ父を探していた…のだと後で判った。

高速道路のトイレでオムツ交換をしなければいけないはめになり手にウンコがつきどうしようもなかった。

でも、こんな大変なことを父が12年間もやっていただ…ということになり、自分の気持ちも変わってきた。

オムツ交換と時、母は笑っていた。息子にオムツを交換してもらおうことが恥ずかしい…の表現が笑いだと後でわかった。

父はよく母をつれて外を歩いていた。母は病気をかかえながら必死に生きているんだよ！…と父は言っていた。母が若年性アルツハイマーになった時、父は心臓のバイパス手術を受けたばかりだった。父は命がけで愛した母を看護していたのだ。

介護を継続しているうちに徐々に絆を感じてきた。母の認知症の病気が親子の絆を強くしてくれた。普段はイライラの気持が多かったが、母が人を思いやる気持をひきだしてくれた。自分は母に育てられていると感じた。

母を看護していて「人は存在するだけで価値がある」と思った。徐々に介護の方法も変わってきた。だけど、感情だけはどうしようもない。

母が亡くなって2ヶ月が過ぎた。最後の時、6時ごろに一度息が切れた。がまた息を吹き返した。その後、仕事に出てしまった。そして7時ごろ息を引き取り、母の死に目には会えなかった。

母は24年の闘病生活の後、なくなったのだ。正直、もう、ユックリしろよ！というホットした気持だった。肩の荷がおりの感じだった。

認知症をかかえて一生懸命に生きていた母は私を一人前に支えてくれた。

自分は母を支えていたと思ったが、実際は母に支えられていることが判った。